特116
716

七號箱
彌法師
法上
圭

始

觀古堂

特116
716

七騎落

概説　外十三巻ノ一

石橋山の戦敗れて頼朝は安房の方へ落ち行かんとしける時、一行は八騎なりしかば八騎といふことは源氏に取りて不吉の例なりとて其の中の一人を船より下せと頼朝の言ひ出でしより、誰か彼かと選びしも、いづれも主君と命を共にせんと應ずるものなかりけるに、土肥實平は其の子遠平と共に父子二人在船しけるを以て、父子の中一人を下船せしむることゝなり、遂に遠平を去らしめたるが、其後遠平は和田小太郎の手に救はれて、頼朝に忠勤を抽でけり。

大正
11. 4. 5
内交

此曲確カリ強メニ謡フト雖モ心持緩急少ナカラズ心スベシ
小書 恐之舞

役別		装束附
ツレ	源頼朝	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 半切 法被 縫紋腰帯 太刀 扇 指 弓矢持
シテ	土肥實平	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 半切 法被 縫紋腰帯 太刀 扇
ツレ	新開次郎 土屋三郎 田代冠者	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 腰帯 太刀 扇
ツレ	土佐房	長範頭巾 着附厚板 半切 法被 腰帯 太刀 扇 金地襷
子方	土肥遠平	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 白大口 側次 太刀 扇
ツレ	岡崎義實	梨子打烏帽子 白鉢巻（若キトキハ白垂ヲ用ユ） 着附厚板 法被 半切 縫紋腰帯 太刀 扇
ワキ	和田義盛	梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 法被 白大口 腰帯 扇 指 弓矢持

季	八月	曲柄	四、五番目（畧二番目）
所	前ハ相模國足柄郡真鶴崎 後ハ相模海上	稽古順	準高等

七騎落（シチキオチ）

作者不詳

シテ立衆 次第 上

身の捨小舟うらみても。身の捨小舟うらみても。かひなきや憂世なるらん

ツレ頼朝

これは兵衛の佐頼朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戦に身方うち負け。餘りに無勢にて候程に。一まづ安房上総の

方へ向かばやとおもしいかよ去肥
の次郎 御前にて 頼朝 餘りに身方
を勢にある間。まづ安房上総の
方へ向かうずるにてあるぞ急い
で母の事をもしたしけれ。長つ
てんぞくより御母の事を申し
付けて仕るいでしたうずる

てん 頼朝 いかに實平 御前にて
唯今弓中に供したる人数のいかほど
あるぞ 実平 実平 頼朝 さて八騎ばかり作
と思ひ出だしたる事あり。祖父為
義鎮西へ向きし時も主従八騎。
父義朝ば川へ落ち給ひしも主

後八騎。思へども不吉の例あり。実平はからひて船より一人あろう作へ長つて小。実平仕せ承り。舟のせがいよりたちあがり。御供の人々と八度せばまづ一番には田代殿

地 さて二番には新開の次郎 又 シテ 三番には土屋の三郎 地 四番は土佐

子方遠平 同じき遠平 シテ 艫板には 地 義賓

○小鼓

ありり 地 この人々の君のため。この人々の君のため。龍門原上の土佐屋とび曝すとも。惜しかるまじき命かな。行れもと撰み出だすとて。もの実平思ひかね。赤面したる。

ばかりあり。赤面（あかつら）たるばかり（閑心）あり。
頼朝詞（かけて）
いかに貴辛。行（遅）とて遅きぞ急いで
あるべし。畏（しこ）まつて（先ヲカヘ重ンモリ）いかに国清殿（かきどの）
やしは。急いで御前（おんまへ）より御（おん）あり
べし。義実（かけて）行と（ツレ）申（かけて）
ばや。なかなか（シテ確カリ）の事。義実（かけて）暫く。この（閑カノニ）
御供（おんとも）の内に。某（いち）の老體（らうたい）そは程に。

かひかひしく。御用（閑ノ心）にも立つまじきを
去とて。限られて。かやうに
承りは。遅（遅）そのはずに於ては御前（おん）より
つかはり。仕まつ（シテ重ンモリ）いやいやさやうの
儀にてはなくは。艦（とも）板（いた）にのされては
ほどよ。陸（くが）の近きにやし仕（義実）いや
可（しょう）なこの船中（ふなうち）に。今（いまだ）二つ持（もち）たらん

する者を御私よりあろされいへ
「それは不思議の事を承りいものか
なぞそれ人は生ずるより死するまで。
命をば一つそそ持ちていへ。二つ持
ちたる謂のいか 義貫 「きんぴ」も昨日
までの命を三つ持ちていと。早一
つの命をば我が君に参らせよげ

てい 「きてそその謂の作 義実 「そ」の事
にていい。昨日石橋山の合戦にぞい
て作真田の子一義忠の副将軍
を賜はり。俣野と組んで討たれ
ぬ。それ親子は一躰二つの命お
らずや。見ヤせべ土肥殿てそ。その
御母に親子一所よ渡られいへ分

殘つて遠平とあろうずか。遠平を
殘して御分あるべか。親子の四人
ありられいや。シテ重ンモリ先にて作。餘りの
道理にものおのたまひぞ。いかに
遠平。君よりの御使にてあるぞ。
急いで御母よりありやへ
子方サラリ何と御母よりありよと仰せか

シテカッテなかなかの事急いでありて作へ
子方サラリ遠平幼くとも。君の御大事に
立たん事。誰にか劣りひべき。御
母よりのありまづくに シテカッテこざかし
き事をやすす者かな。君の御爲父
が命にてのあるきか。急いで御母よ
りありやへ子方サラリいやいや君の御爲父の

命をば背くも。御為よりの御ありまじくん。「言語道断」の事と申すものかな。君の御為父が命をば背くともおりまじきと申すか。その儀ならば人手にはかけまじいざ「増く」これの君の御門出あった。誤りたるか賢平

が語りてい。可註ありまじきと申す者とおろかんより。某御前毎よりおりまうずるはていかに申し候。さらば某毎よりおりいかべ「何と」おりまうずるとやすか。げにげに今てそそ某がふるにて候へ。これをと見てよ敵大勢詰ち出でた。

かまへて裏かうとゐのつて。壽
常に対死せよ。名跡とそ情し
けれかくて秋かぜとおろし置き。
實平御舟にて参りけり。地サラリ ゆゝしく
見ゆる實平かなゝ。互の心と思ひ
やり。親子の別れ痛しや。子方サラリ 父の
別は申すばかなれば。君を始め奉

○小袖
○清水

らせて。皆人々に御名殘とそ情し
うゐへ。上ノ下ノ カの松浦佐用姫カ。カの
松浦佐用姫か。唐土舟と慕ひ俺
びて。渚にひれ伏し。有根も。今
遠平か親と子の別ふかからじ
と。皆涙とそ流しける。上ノ下ノ 二ノ中 子方ロギ上 奥 狂
あき早舟と。暫しとだても言ひ

あへず跡をとゞめ送りたてまつるべ
はや遠ざかる浦の波。立ち別れ
ゆくありさまと餘の人々の心し
て憚みあへる母の内は實平
ひたすら強氣をとゝえて。
なかなかかへりておきもせで。心
強くも行く跡に敵大勢見えたり

すでや遠平の討たるゝとして。頼
朝もあきれみ陸とゝ給へばさす
がに恩愛の。契も唯人うを限
りぞと思ひ實平は。磯邊に向ひ
人知れず。心のまゝならばあきれ
遠平と一所で。詐死せばやとあ
てがれて。涙ぐみ立つ歎かりに思ふ

の別ぞ哀なりける別ぞあは
れなりける。（ワキ義盛一セイ上）弓張月の西の空。行くへ定めぬ舟
路かな（地）沖なる波の音までも。岡
の聲かと。恐しや（ワキ）あれはなんえ
たるかは度舟にてありけるは急い
で舟を漕ぎゆくへ（狂言）是つてはいかて
やしはあれに見紅一艘見えてはまづ
てあたより詞をかけうずるてはい
（義実）ゆるべう仕（シテ）いかにあれなる舟の
誰かをされたる御舟にてはぞ
（ワキ）われもそなたの紅影と。怪しく
思ひ休らふ舟なり。そも誰人の舟
やらん（シテ）それは去肥の次郎実平

が事ゝ成り居る毎ゝ度ゝ
厨の御毎に成ゝ成ゝ
事。さてその御毎の
御毎にてはぞ
太郎義盛が事ゝ成り居る紙ゝ
さてゝ和田厨の御毎にて作か
なかかの事。内々申し通ぜ

何と出肥
なかかの
たが召れ居る
われて、和田の
ワキウケテ

好く。御身方にて集らん方にて
まで事ゝてはゝ。さて君のその御毎
に作か 和田は内々申し合せ
居る事のは内。唯今集りてはゝ
りながらまづ、ばかりて空を
ずるにてはゝ。いかに和田厨へ申しは
れまでの御事ゝ集りめで居りはゝ

なぜかう面目もなきあき事のいひ訳の
言ほどより我が君を人失ひ
しかやうに深かれ毎とありて寿
ねやし作よ　ワキカツテ何と君はその御
毎に浅度おきとびや　シテウケテ　ぢんぢ
ワキカツテ確カリ言語道断の事にてはものかな。
われ身方をとび君び出で門日とも

頼みなる頼朝にはは離れ申しこの
よ度命ありても何かせんぢでぢで
自害にはぢんし腰の刀に手を掛
くる　シテカケテ　暫く君はこの毎にぢ度ぢ
ワキカツテ何と君はその御毎にぢ度ぢとや
シテウケテ　あかあかの事　ワキカツテ　何とてかやう
にはは承りぬぞ　シテ用カシ　これは戯事にて

作。幸陸近(ナカ)うゐほどにその母
をも寄せられゐ。御母をも寄
せ作ひて。陸(クガ)にては對面(タイメン)あらうず
るにては心得(ワキウケテ)やし作。さらばやが
て陸(クガ)へ来らうずるにては いかに(シテ用カニ)
し作法(ゴブ)前(ゼン)にて作 我(ワキ用カニ)が君を見
奉りて。今の安堵(アンド)仕りてはげに(シテウケテ)
げに(シテ)むにて作 いかに(ワキ確カリ)去肥殿に申
し作 仕(シテウケテ)事にてはぞ(ワキカッテ)この御供(オントモ)
の内に行て沸(ブク)き恩遠平は御(オン)
入りはなぬぞ(シテカッテ)その事にて作。
さる謂(イハレ)あつて陸(クガ)より殺し置(オ)きて作
とくとくよりかくし申やひつ
れども。以前真に心をつくさせられ

○小説

いそのの返報にいまだつくさもヤさぬありいでて去肥厩に引出物ヤきんと隠置きたる舟底より。遠平と引き立てゞ見せければ

シテカル上カシテサラリ

その時貫平あきれつ、上月に云ふ夢か現か

柏子合

こはいかにとて呑えず抱き付き泣き居たり。

甲

たゞ人へべ。仙家に入りし身の半ば合のほどに立ちかへり。七世の孫に逢ふ事のたゝへも今に知られたり。

シテ月閑カニ

いかに義盛にゆしぶさてこの者をば伺ふて召し連れられてゆそきんびこれまで伴ひ申したる猶を。沸前にて申しあげうずるてゆ

ワキウケテ

シテ急いで御物語りゐへ（口語確カリ）こそも申ス
石橋山の合戦破れ一かば大庭が
手勢君を討ちならんと大勢備
へ打ち出でたりしに某も一前に
討つて出でゝ一ぱ行をゐれば引き
かねたる若武者一騎ひかへたり某
駒かけよせて見れば源子息遠平

あり。急ぎ馬より飛んでおりぱ生
け捕る體にもてなす無礼のせ
ヤし。これまで使ひ来りたりなん
ぼう出肥殿に義盛の忠の者にて
いぞ（シテ閑カニ）かゝる有難き事こそはね。
唯今の御物語と聞きゐひて嬉
敷仕りてゐと。さぞ人々の不覚の

涙とや思し召すらん。さりながらうれし泣の涙の。うれし泣の涙の。何か包まん唐衣。日も夕暮になりぬれば。月の盃とりどりに。

シテ上 主従ともに悦びの

地 心うれしき酒宴かな

ワキ詞 いかに實平。餘りにめでたき折なれば。ひとさし御舞ひ候へ

シテ さらばひとさし舞はうずる

にて候

地上 心うれしき。酒宴かな

男舞

キリ上 かくて時日をめぐらさず。かくて時日をめぐらさず。国々の兵馳せ集ずれば。程なく御勢二十萬騎になり給ひつゝ。掌に治め給へるこの君の。御代のめでたき始めも。實平正しき忠勤の道に入る。實平正しき

○仕舞

忠勤の道に入る者笑の家にて。久しけれ。

弱法師概説

外十三卷ノ二

河内國高安の里に左衛門尉通俊といへる者、人の讒言を信じて一子俊德丸を追放せしが、後に其事なきを知りて不憫に思ひ、俊德丸の二世安樂の為天王寺にて一七日施行を為しけり。俊德丸は親の許を離れて悲みの涙に盲目となり、乞食と落ちぶれて天王寺に來り、施行を受け、ゐを通俊視て我が子なる事を知りしも、人目もあればとて先づ何氣なく日想觀を拜まゝめしに、俊德丸は感興に乘じてよろめき歩くを人々弱法師とのゝしり笑ふ。いつか日暮れ夜も更けたれば、名乘り合ひて連れ立ち歸りけり。

此曲アマリ位ヲ取ラズサレド餘リサラリトスルハ悪シ
小書　盲目之舞

役別	装束	附
ワキ	高安通俊	着附段熨斗目　素袍上下　小刀　扇
シテ	高安俊德	面弱法師　黒頭　黒地錦卷　着附無色縫箔　水衣一地色紺、前黄（頼）　縫紋腰帯　無色黒骨扇指　杖ツキ

季	所	曲柄	替古順
二月	大阪四天王寺	四番目（春二三番目）	準高等

ワキ通俊詞　確カリト南カニ

かやうに候者は河内の國高安の郡に住居仕る通俊と申す者にてはさてもかの盲人を持ちてはとさる人の讒言より暮に遁ひ失ひて候。餘りに不便なれば。二世安樂のため天王寺にて一七日

結崎十郎元雅作

弱法師

施行と引き作。今日も施行と（気ヲカヘ確カリ）
引かせざやとなじ作（狂言シカヾ）
出入の。月と見ざれば。明暮の。（シテ俊徳丸ニ用カニ一セイ上ハ　ヨワク柏子ニ合ハズ）
夜の境とぞ。ぞ知らぬ（ニテ句ウ気ヲカヘ）雑波の
海の底ひ。深き心持思ひと。人や（テ打ツ上ツ）
知る（用ヲ甲サシ上気ヲカヘ）それ驚の。餐の下よ。立
ちする思と。悲み。此身の枕の上に

は彼と隔つる。悲あり。況や心あ
り。顔ある。人間。富高の身とあり
て。憂き年月の流れて。妹背の
山の中に。高つる。吉野の川のよし
や。世と思ひも果て。如何。情ま
しや前世よ。誰とか。献ひけん。今
人の。後言により。不孝の罪に

沈む故。思の深かき暮り。盲目
とき人あり果て。生ともかへぬこの
世より。中有の道よ。迷てあり
下ニ弟中ニ　危ヲカヘ用カニ　イ中　イ用ル心ザ
柏子ニ合カヘテ　上ニ弟伸ンビリト用カニ祈ヘメニ
固よりも心の闇
傳へ聞く。彼の二行の果羅の旅。か
の二行の果羅の旅。闇穴道の巷
ふも。九曜の曼荼羅の光明。森

奥にて行末を思ひ。悪しき給ひける
とかや。人うも未世といひながら。ふ
ぶるとおもてのたに寺の。佛法最初の
天王寺の石の鳥居。あれや。立
ち寄りて拝まん。いざ立ち寄りて
拝まん　手カ上ニ用カニ　須ク柏子ニ合ヘ　須は二月時氏の日。真に
時も長閑なる。日を得て遍き

貴賤の場に施行をあてまそめけり。げに有難き御利益法界無邊の御慈悲ぞと涙を接いで群集する。やこれに出でたる乞丐人いかさま例の弱法師よ。おゝ汝われらに名をつけて皆弱法師と作せあるぞやげにもて

の身は盲目の足弱車の片輪か。からよろめきあるけば弱法師と。名づけ給へとわりありげに云ひ捨つる言の葉までも心ありげに聞ゆるぞやまづまづ施行を受け給へあらゝ有難や仏や花の香の聞えいかさまとの花散

方にあり作おき　切うてれある雛
の梅の花が弱法師が袖より散り
かゝるぞとよ　憂たてやお雛彼
津の去ならばたゞ木の花とそ
作せあるべきと。今の春鳥も半ぞ
かゝ。梅花と抑つて頭に挿しそふ
まざれども。二月の雪の衣より薄つ。

○小謡

中　あら面白の花の色やお　ワキ　げふこの
花と袖に受くれば。花もさおがら
抱げ、ぞとよ　シテ　おかなかの事草
木国土。悉皆成仏の大意悲よ　ツレ　伸れば
施行よ連てうて　ワキ　手と合せ　シテ　袖と
廣げて　ツレ　花とさへ受くる施行の

色々に受くる施行の色々にて白
き衆よりけり梅衣の春あれや雑
彼の事か法あらぬ遊び戯れ筆
び誤り。折々の網よりの伸るまづき。
那彼の海ぞ頼もしき。げにや盲
亀のわれらまで、見る心地する梅
が枝の。花の春の長閑けさの難

○サシ曲独吟

彼の法よりも伸れじ那彼の法
よりも伸れじ。それ仏舎日西天の
雲に隠れ。慈尊の出世遥にて。
三會の暁。未だ有り。ありてのの
中間に於いて。行と心と延べ入ましし。
たてよりて上宮太子。國家を改め
万民を教へ仏法流布の世とあ

普く恵を弘め給へば。當寺を御建立あつて。始めて僧尼の姿を顕し。四天王寺と名づけ給ふ。金堂の御本尊。如意輪の佛像。救世観音とも申すとかや。太子の御前生。震旦国の思禅師にて。渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつゝ。今日域に至るまで。佛法最初の御本尊と。顕れ給ふ御願光の。真なるかなや。末世相應の御誓ひ。頼もしき哉。當寺の佛閣の作りの品々も。赤栴檀の霊木にて。塔婆の金宝に至るまで。閻浮檀金なるとかや。萬代にすめる亀井の

水までも。水上清き西天の。無熱
池の。池水と。受けつぎて。流久し
き。代々までも。五濁の人間を導き
て。海度の舟とも。寄するなる。雅
彼の寺の。鐘の。聲。異俗々て聞き
給て。普き。拯を。満潮の。おし照る
海山も。皆成佛の。法あり。

平内カッテ
あら。面白。嬉やの。これなる者をよく
よく。見へ。為が。追ひ失ひ。まして
て。作ないかよ。思のあまりに。盲目
とおりて。ぬあらぬ。侍と。衰へて。作
ものかな。人目もさすがに。いへば。
夜に入りて。為ふと。名告り。高安へ
連れて。帰らぞやと。ねじひ。やあ

いかに日想観を拜みたへ（シテウケテ）げにげに
日想観の時分あるべし。盲目か
れだそあたくとべかり心あてある
日に向ひて、東（ヒガシ）を拜み南無阿弥
陀佛（ダブツ）（ワキカケテ）何東門と申（イハン）あやまつの西
門（モン）石の鳥居（トリイ）よ（シテ用カニ）あら愚や天
王寺の西門（サイモン）を出（イデ）て極楽の東門

よ向（ムカ）ふ傍（ヒガ）事（コト）か（ワキカル上朗カニ）げにげによさそと
雖彼の寺の西門（サイモン）を出（イデ）る石の鳥居
（シテ用カニ）阿字門（アモン）よ入（イ）つて（ワキウケテ）阿字門を出（イデ）る
（シテ云フカ用カニ）弥陀の御国も（ワキ）極楽の（シテ云フカ用カニ）東門
（改メテ伸ンビリ）で向（ムカ）ふ雖彼の西（ニシ）の海（ウミ）（地ウケテ大キク）入日の影
（○狂言迄難子）も華（ハナ）やかや（シテ用カニ気ヲ入レ改メテ用カニ）あら面白やわれ盲
目とあらざりし前の弱法師が

常に見馴れし境界あれば。何
疑も雖彼江月照し松風
吹き。永夜の清音何のあす前
ぞや（ワカ上朝カニ用カニ）住吉の松の蔭より。眺むれば
○仕舞（地中）月落ちかゝる淡路鳴門と（シテ中）眺め
しの月影の。（中心持シ）眺めしの月新の今
は入日や落ちかゝるらん日想観

あれば曇も彼の淡路絵島須
磨明石。紀の海までも見えたり
見えたり。（シテ）あゝ。（文カシエルヤ）見るぞとよ見るぞとよ（地上）さて雖彼の浦の致景の数々
（シテ）南はさてそとも。彼の住吉の松影
（地上）東の方は時を得て春の緑の

草香山地カッテサフラヒ北はいづく雅彼あるヤ
長橋の橋の橋の後よりかなたてあたヤ
とあり〳〵ぞ狩よ。盲目の悲しさの。
貴賤の人よ行きあひの。軒びえ
ひ雅彼江の。見もとはよろよろ
と。けしも眞の。踊法師とて。人
は見ひ給みぞや。思へば恥しや

あ今は狩ひ法師は今よりは
更に狩はじ今より入
更け人も靜りぬいかなる人
の果やらんその名を名告り
給へや思ひよりずや淀あれば。
我がいもとへと向ひ給ふ。高安の
里あり。後徳丸が果あり

地上 さてはなつかしやわれこそは。父高安の通俊よ。そも通俊は我が父のその御声と聞くよりも胸うち騒ぎあきれつつ。この夢かこの夢地 俊徳は。親ながら亦しとてあらぬ方へ逃げ行けば父は追ひつき手を取りて。何と地

かつむ雖彼寺の鐘の聲も夜まぎれよ。明けぬさきにいざあひて高安の里に。歸りけり高安の里に歸りけり

絃上概説　外十三卷ノ三

太政大臣藤原師長、琵琶の奥秘を極めん為め渡唐せんとして途すがら須磨の塩屋に宿りけるに、主の老夫婦は師長の琵琶に堪能なる由を聞き知れるものとて一曲を所望し奉る。師長請にまかせて彈じけるに、俄に村雨の降り来りしかば、翁は苫を取出して板屋を葺き、琵琶の調子は黄鐘、雨の音は盤渉なれば、今こそ一調子になれりと言ふ。師長たゞ人ならじと思ひ、琵琶を渡して一曲を彈ぜしめけるに妙技神に入れるより渡唐を思ひ止り、其名を尋ぬれば村上天皇女御夫婦なりとて姿を隠せしが、やゝありて天皇現れ給ひ、龍王に救して琵琶の名器獅子丸を召し出させ、秘曲を師長に傳へ給ひけりとぞ。

此曲位モ軽カラズ緩急モ亦多シ能々具合ヲ考ヘテ謡フベシ

小書　宛　脇能之式

	役別	装束附
ツレ	藤原師長	風折烏帽子　着附厚板　白大口　草狩衣又長絹　縫紋腰帯　神扇
ワキ	師長従者	着附厚板　白大口　法被　腰帯　太刀　扇
ワキツレ	師長従者二人	着附無地熨斗目　素袍上下　小刀　扇
ツレ	姫	面姫　姫髪　無色髪帯　着附摺箔　無色唐織　縫水衣
前シテ	老翁	面笑尉又朝倉尉モ　尉髪　着附無地熨斗目又小格子厚板モ　縫茶水衣　掛子腰帯　蹴鞠　尉扇箱　田子持
後シテ	村上天皇	面中将　初冠(纓)　着附赤地縫箔　草狩衣　冠太口　差貫　腰帯　扇
ツレ	龍神(ルナシ)	面黒髭　赤頭　龍戴　赤地金紗鉢巻　着附段厚板　法被　赤地半切　紋付腰帯　打杖持　琵琶持

李	所
八月	摂津　泉州　武蔵　相模　駿河　遠江
曲柳	誓願寺
五番目(能脇)	高砂

金剛弥五郎作

立衆　謡カニ(師長総次)

次第　上

ヨワク　拍子二合

八重の塩路を行く舟の。八重の
塩路を行く舟の唐土いづくなる
らん　師長汀　謡カニ　そもそもこれは大内師
長なり　ワキサラリ　そもそもこの
君天下に隠れなき琵琶の御ゴ
手にて候ひかし。入唐の御望ま

ますによりて。この度思し召したち
道すがら名所の月をも御覧ぜん
ために。唯今津の国須磨の浦に
御下向にては。われはまたいつの
夕を都の空まだ夜深きに旅立
ちて。まだにつえたる山崎も。過ぐ
れば後になりて。波てす袖の
湊川。波てす袖の湊川。まだ暮ら
ぬ。方にもわれは生田の曇りくる月
の木の間にて。心筑紫の旅の道。
きれどもこれは唐土の。門出と思へ
だ勇ある。駒の林をよそにて見
て。須磨の浦にも着きにけり
須磨の浦にも着きにけり

日本武尊
御急ぎは程にたれぬきや律の國
須磨の浦に御着きたては。暫くて
の前よ御休みあり。ここの由をも
御尋ねあらうずにて作
シテ尉 ツレ姥 二人上 柳ノミ用カニ
持ちかぬる。汐汲む桶の苦しきよ。
柏子三合八ベ
又カづく。老の杖 松き葉と須
磨の浦 二人用カニ 眺にて憂きや。古るらん

シテ母シ上 柳ヘテ朗カニ
面白や浦よ入日は海上に深。須
磨や明石の浦のまよ。塩焼く蜑
の心にも。きも面白う作あり、
ツレ 南を遠に眺むれば雲に續ける
紀の路の小島 シテ月用カニ 由良の戸渡る
たゝや舟も。汐追風の吹上や
ツレカル上 遠方おかから住吉の。松てそんかれ

○小謡

海越て　富鴻の磯や見陽雄彼
名にし負鴻と云ひおからいかで
か筆にも及べき　あら面白の
浦の景色や　げにや面白き　蜑
の磯屋とや　淡路潟　阿波沖　毎の
漕ぎ来る舟　雨ごとめれ　今一返
も　汐汲めやく　人ぞ　そよや陸
奥の　そよや陸奥の　千賀の塩
竈の　名のみ　遠ければ　いかで
運ばん　伊勢鴻や　阿漕が浦の
汐とべ　度重ねても　汲み難し
田子の浦の　汐とべいざ　とりたん
わくらにて　訪ふ人あらば　他ごと
答へて　この須磨の浦の　汐汲まん

須磨の浦の海人(あま)。塩屋(しほやに)に帰り休まうずるにては。塩屋の主の帰りては。御宿を借らばやとおもじゐ。いかにてはれあるは塩屋の主にてあるか。しんば塩屋の主にては。それには座ゐのだぶ改太夫殿長公とやして。天下に隠れまうまきぬ現

老の御ど手にて作が。入唐の御望にてこの浦に御下向にては。一夜のお宿と参らせ作へいやさやうの人にて御座ゐつ。異浦にて御宿とこそれゐへあらいかともおや。強波わたりにてこそ異浦あんどゐすべけれ。須磨の浦までゐ

なきかたぐ御宿とまらせ作へ
見者〳〵りへどもさらば御宿を乞
らせりべ　されべ一年雨の祈の御
時。祈泉苑にして。琵琶の秘曲を
遊べされかば　シテ「ワ」龍神もめでける
にや。さしもの晴天俄に曇り大
雨降る事絶ざる。それよりしてこの

君と。雨のだ居とのやすとかや　正　かほど
やどあきこの君に。一夜のお宿を参
らせて　シテ「秘」曲とも聽聞やすあらば
シテ二人「例」あきの思出　シテ「月」の蟬丸の逢坂や
蔦屋にて琵琶を弾き給へ。今この
君の須磨の塩屋露もたまらぬ軒の
板間。遇ひ難きあ（逢）ぞ嬉しかり

けう。上手朗カニサヘリ。里離れ。須磨の家居の習と
て。須磨の家居の習として行事と
松の桂や行あめ。ある垣の一重にて。風も
たまらず痛しや。海のおし遠けれ
ども。波たゞてもとて。角えきていつの
まにか。夢ともぼえんべきよしよし
それも御琵琶と。寝られぬまゝに遊
ばせやわれらも聴角すべわれも
聴角ヤさん。いかにやしよげい。夜も
すがら御琵琶と遊べされゝ。師長カ凡上サヲリ
須磨の巻の春かゝよ。原氏この浦で
拍子合バヤ
猿され給ひ。初めて妻の味の辛き
を知ることいとゞも。まだ行じまぬ旅衣
泣くばかりある夜の家の。玉の緒琴

○小謡

を弾き鳴し。意ひわびて。流く音にて
まがき浦波の。思ふ方より風や吹く
らん。（柏子三合）それの浦波の。音通ふらし琴
の音の。音通ふらし琴の音の。て
れの弾く琵琶の。とりかはれや
村雨の。古屋の軒の板庇。目覚ま
す程の夜雨や。簾絃の障るらん。

シテ（用カニ）
や。何とて御琵琶とび遊ばしそめ
られていざ（ワキサツリ）さんび村雨の降りい
ざ。さて遊ぶ笛められてい
（シテ）げに村雨の降りいざやいかに焼。
苫取り出しいざ（ツレサツリ）それの行のため
にていやらん（シテ）苫にて板屋を葺
き渡し。静に聴角やさんと

シテ二人上 狂言と姥は諸共に 苔取り出し
抽子三合ハズ
シテ 苔と葺き 抽子三合 塩竈の浦の近くと
寄り居つゝ。耳とそばだて聞き居
たり 甲 口羽カツテ いかに主。かほど伸らざる板
屋のことを。何しに苔にて葺きてあ
るぞ シテ 用カニ 苔ばかり唯今遊ばされ琵琶
の御調子は英雄。板屋を敲く雨
の音は盤珍にて。苔にて板屋
と葺き隠し。用カニ 口ミ地上サラリ 苔にてそ 調子にはありて
ひへ 抽子三合 苔ばかりそ始めより。常人か
らず思ひ心にくしや琵琶琴
を。いかでか弾かであるべき 甲 シテ二人上 用カ 中 雨から
はのぼり。出都すぼの弾きや
せん 琵琶琴の。思ひもよらぬ詞

あり、地風ひとしらずも琵琶の音の押して
琵琶と賜りて（シテ中用ノ）あぢの琵琶と
調むれば、（ツレサラリ）曉は琴柱と立て並べて
撥音代音だらり心からりばら
りと。感涙（カウ用ノ）（ハカ）もこぼれえいづもとどる
ばかりなりや彈いたり弾いたり面白や
師長中と（用カニ）（師長中）（用中サラリト半蓮ビラツケ）師長思ふやう。師長思ふやう。われ

日の本にて琵琶の奥儀と極めつ。
大國と窺（ウカガ）（ヨスル）もしんと。思ひ一事の
情まし（ヨスル）さすや。（ヨスル）のあたりかくる堪能
ありける事よ。（ヨスル）（ヨスル）徐渡唐と留まら
んと。思ひて塩屋と出で給へ。それ
をも知らで琵琶琴の心一つの
しみみて。翠天楽の唱歌の聲。

上 梅が枝にてそ鶯の巣をくへ風吹かば
いかにせん花に宿る鶯。宿人の帰る
とも知らで弾いたり琵琶琵琶琴—
ツレカヽル なう旅人の。御立ちか
シテカヽル 何旅人の。御立ちとや何とて留めやさぬ
ぞと
シテツレ二人上 祖父と姥は去りより
琵琶琴よりも御袖をたぐ引け

や引けや横雲の夜はまだ深し浦
の名の明かしておぼえ給へ
地長ロンギ上 何し
に留め給ふらん。まづこの度の帰洛
して重ねて尋ねやすべし。御名をと
名告り給へや
シテツレ二人上 今は何をか包むべ
き。われ絃上の主たりし。村上の
天皇梨壺の女御夫婦なり

○切返 囃子

上同

御身の入唐留めんため。夢中にまみえ須磨の浦。故院の昔の夢の告思ひ出でよ人ぞとてかき消すやうに。失せ給ふかき消すやうに失せ給ふ

後シテ村上天皇上朝カミ伸々ト確カ

出端

そもそもこれは。延喜聖代の御讓村上の天皇とはわが事なり。その聖代の御宮かしよ。唐土より三

面の鼓を渡さるる。弦上青山獅子丸これあり。ざる程に獅子の龍宮へ移られしとぞ。いでいづし弾かせんと。漫々たる海上に向ひいかづち下界の龍神慥よ同け。獅子丸持参仕れ

早笛

獅子丸

（龍神出）

丸字ふしぎなりかば。獅子丸字ふしぎなりかば。大龍女を

引き連れ引き、連れかの御琵琶と。
授け給へ。師長賜り弾きあらし
八人龍王も絃管の役々或は彼の。
鼓と打てば。或は琵琶のゆし員
み。獅子の圓乱旋に村上の天皇も。
袴で給面白かりける。秘曲かな（早舞 中上 中上 辺）
○仕舞 シテ中 獅子にの文殊や召さるらん。獅子にの
文殊や召さるらん。（上）帝の花びの車
に乗じ八大龍女に引かれ給へば
師長も花馬に。鞭を打ち。馬上に
琵琶と。携へて。馬上に琵琶と携
へて。須磨の浦波ぞ。有強き。

特116
716

著作權所有
無斷轉載

大正拾年一月十日印刷
同　年一月十五日發行

訂正著作者　廿四世　觀世元滋

京都市上京區二條通麩屋町東北角
發行兼印刷者　檜常之助

東京市神田區錦町一丁目拾番地
發行所　檜大瓜堂

東京市四谷區傳馬町貳丁目
印刷所　江川堂

終